

2007年 6月 26日(火)  
 全労協事務局発行  
 TEL 03-5403-1650

全労協fax情報 NO.993

沖縄戦の「集団自決の強制」

# 歴史の「書換え」を許すな!

～「集団自決の強制」の削除という文科省の検定意見書に対し  
 沖縄県議会が全会一致で「撤回」を求める意見書を可決～

沖縄県議会は、6月22日、文科省が沖縄戦の「集団自決の強制」・「日本軍関与」の記述を削除した教科書検定を出したことに對して、全会一致でその「撤回」を求める意見書を可決した(別紙・マスコミ報道参照)。

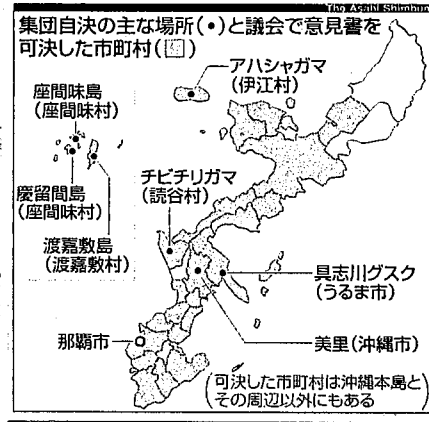
これは、08年度から使用される高校歴史教科書の検定で、文科省が沖縄戦の「集団自決」、「日本軍関与」について、断定的記述をしないよう検定意見を付した。この検定意見を受けて同省の「教科用図書調査審議会」は、「削除」するよう検定意見として教科書各社に通知したのである。

これを受けて、例えば、三省堂の日本史Bでは「日本軍に『集団自決』を強いられたり・・・」の記述を「追いつめられて『集団自決』した人や・・・」という記述にまた、実教出版の日本史Bでは「日本軍のくぼった手榴弾で集団自殺と殺し合いをさせ・・・」の記述を「日本軍のくぼった手榴弾で集団自殺や殺し合いがおこった」という記述に修正させられたのである。

沖縄戦は、本土防衛の地上戦として、1945年3月27日から6月23日まで激戦が繰り返され、県民の1/4もの多くが犠牲となる悲惨な戦いであった。これは、本土防衛の沖縄戦を長期化させるため、日本軍の極秘文書では「軍民共生共死の一体化を具現し」として、沖縄県民を戦争に協力・参加を強要し、最後は、機密防衛のために「集団自決」を強制したことは、歴史的にも、多くの証言からも明らかな事実である。

それを今、安倍内閣は、「軍命令を実証するものはない」として教科書検定で削除を強要してきているのである。これは、従軍慰安婦問題でも「軍の強制を実証するものはない」として、日本軍・日本国は責任はないと言い逃れを言い始めているのである。

これは、歴史の改ざん・書換である。それは「戦争できる国・日本」づくりのためには、日本軍に対する不安感・疑義を取り除こうという狙いがあるとされている。この歴史の改ざん・書換を許さず、沖縄県民と連帯して闘おう。



文科省が検定意見をつけたのは「軍が命令したかどうかは明らかと言えない」との理由からだ。この事実が3月末に分

検定意見が変わる可能性はあるのか。伊吹文科相は22日の会見で「大臣が検定に介入できるという道を私の代で開きたくない」と述べた。しかし、沖縄戦をめぐる検定が政治判断で変わった

これは過去にある。82年の検定では、日本軍による「住民殺害」の記述が削除され、県議会が撤回を求める意見書を採択した。参院決審委員会で小川平二文部相(当時)は「次の検定の機会

これに対し伊吹氏は、検定調査審議会の客観的な判断に文科相が口を挟むことを、検事総長に対する法務相の指揮権発動を引き合いに出して「あつてはいけない」との立場をとり続けている。ただ、今回の検定意見は、文科省の教科書調査官らが審議会に提出した「調査意見書」と同じ結論となっている。審議会には総会を除いて議事録も含めて非公開で、議論の中身を検証できないのが現状だ。

## 沖縄集団自決

# 「軍関与」で全会一致

### 県議会意見書 教科書検定に異論

日本軍が住民に集団自決を強制したという記述を削除した教科書検定に對し、沖縄県議会は22日、ノーの意思表示をした。全会一致で可決した意見書は、文部科学省の検定意見の撤回と、削除された記述の回復を求めており、すでに沖縄の約9割の市町村議会も、同様の意見書を可決した。だがどうかかわったかでは論議があるにしても、「軍の関与」があったのは紛れもない事実――。集団自決が起きた現場から、与野党の立場を超えて教科書検定に異論が上がった。

「日本軍による関与なしに起こり得なかった」と意見書に盛り込まれたこの表現が、沖縄の一致点だった。

文科省が検定意見をつけたのは「軍が命令したかどうかは明らかと言えない」との理由からだ。この事実が3月末に分

かった直後、仲井真弘多知事は革命の有無について明言を避けた。「広い意味で革命があったのではないかと踏み込んだ

この間、県教審は、体験者の証言を載せた県史を改めて調べた。その結果、兵士から手投げ弾を渡されたといった証言などから、広い意味での軍の関与はあったと判断した。

野党側は「自決に追い込んだ主体をもっと明確にすべきた」と反発し、19日午後の委員会でも「軍による命令・強制・誘導」を明記した対案を出すことも検討した。逆に自民党県議会は「『命令』が入るなら反対討論に立つ」と同日、県議会の廊下。

ある仲里利信委員(自民党)が、当時8歳だった自身の体験を語った。200人ほどの住民と隣に隠れていたところ、3人の日本兵が来て、泣き続けていた3歳の妹と、いっこに癖入りのおむすびを食へさせるよう迫った。敵に気づかれるのを恐れたためだった。家族は「死ぬ時は一緒だ」と襖を飛び出した。意見書可決へ足並みをそろえるために、この体験を明かした。

## 文科相「検定に口挟まず」

これに対し伊吹氏は、検定調査審議会の客観的な判断に文科相が口を挟むことを、検事総長に対する法務相の指揮権発動を引き合いに出して「あつてはいけない」との立場をとり続けている。ただ、今回の検定意見は、文科省の教科書調査官らが審議会に提出した「調査意見書」と同じ結論となっている。審議会には総会を除いて議事録も含めて非公開で、議論の中身を検証できないのが現状だ。